

# 明治期文明論の時間意識

——徳富蘇峰『将来之日本』における明治日本の現在——

小 宮 彰

## 一、文明論の時代

十九世紀中葉そして後半は、日本が、一八五三年のペリー来航をきっかけに近代国際社会の中に急速に組み込まれていった時代である。それは、必ずしも、日本社会が自らのぞんで採った道ではなかった。むしろ、開国とは、世界全域に拡大を続ける西欧文明の抗しがたい圧力によって、強制された選択であったと言えるだろう。

もちろん、この時代、西欧を中心とする国際社会に強制的に組み込まれていったのは、日本だけではない。インドやアフリカ諸国のように西欧諸国の植民地となる運命をたどった地域もあった。その中で日本は、幕末の激動、明治維新を経て、比較的すみやかに自ら決意して、積極的に西欧を中心とする近代国際社会に参加すべく、社会の近代化への歩み

を始めたことに、特色がある。

そして同時に、この十九世紀中葉から後半にかけての時代は、西欧近代社会の中で、西欧文明自体特別なあり方についての自己意識ともいべき、地球大の文明論の枠組みが作り上げられ、完成されていった時代でもある。

そのような文明論の枠組みを、最初に提示したのは、フランス革命の中で活躍し没した思想家コンドルセ (Marie Jean Antoine Nicolas de Caritat, Marquis de Condorcet, 1743—1794) である。

コンドルセは、遺著『人間精神進歩史の概観』 (*Esquisse d'un tableau des progrès de l'esprit humain, écrit en 1794*) の中で、人間の歴史を、全く文化をもたない原始状態から始まる、十段階の文化発達段階として記述した。そして、その第十段階を、フランス革命以後の科学

的精神に導かれる時代であるとした。したがって、人類の歴史は近代にいたって、新しい、そして最終的な段階に入り、そこでは、この発展が起こった地域である西欧が、人類全体を導くことになる、とコンドルセは述べた。

コンドルセによって提出されたこのような文明論の枠組みは、十九世紀に入ってから、コント (Auguste Comte, 1798—1857) 等によって理論的にも大きな発展を見、また広い範囲の人々に一般的に受け入れられるようになる。十九世紀におけるそのような文明論の展開をもたらした要因として、次の三つの要素を考えることができる。

第一に、実証的な科学の発達がある。十九世紀に入って、科学は無機的な自然科学の分野をこえて、生命的自然の分野をもとらえるようになり、さらに進んで、経済、政治など社会的領域でも、科学的な法則性が見出されるようになる。そして、こうした発達の方向は十九世紀を通じて、より確かなものとなって行く。西欧社会の人々は、着実に確実性を増し、技術的にも大きな成果をもたらしたこの「科学」という知を、人類が初めて到達しつつある絶対的な知のあり方と見なし、そうした知を生み出した西欧文明に、他の諸文明を越えた位置を与えた。

第二に、進化論の与えた衝撃がある。ダーウィン (Charles Robert Darwin, 1809-1882) によって、一八五九年に刊行された『種の起源』(On the Origin of Species by Means of Natural Selection, or the

〔表1〕 西洋文明論の系譜

1754	ルソー	『人間不平等起源論』
1794	コンドルセ	『人間精神進歩史の概観』
1830—42	コント	『実証哲学講義』
1853—55	ゴビノー	『人種不平等論』
	1853	ベリー、浦賀に来航
1855	スペンサー	『社会静学』
1859	ダーウィン	『種の起源』
1863	ハクスリー	『自然界における人間の地位』
	1868	明治維新
1871	タイラー	『未開文化』
	1875	福澤諭吉『文明論之概略』
1876—96	スペンサー	『社会学原理』
	1879	加藤弘之『人権新説』
1884	エンゲルス	『家族、私有財産、および国家の起源』
	1884	徳富蘇峰『将来之日本』
	1896	徳富蘇峰『大日本膨脹論』
1918—22	シュペングラー	『西洋の没落』
1934—61	トインビー	『歴史の研究』

Preservation of Favoured Races in the Struggle for Life, 1859) の中に示された「進化」(evolution) という考え方は、生物学という枠を越えて、十九世紀西欧の知の全体に大きな反響をもたらした。

それは、そこで示された生物の連続的な変化が、環境にもっとも適応した種にのみ生存を許す「自然淘汰」という普遍的な自然法則の結果としてとらえられたからである。そして同時に、この進化論は、人間を、このような進化プロセスの生成物として見る見方を含んでいた。このこ

とは、同時代の人々の間に進化論に対する強い反感を引き起こしたが、また、積極的に人間の社会をも、そのような進化の法則の観点からとらえ直そうとする考え方を生んだ。スペンサー (Herbert Spencer, 1820-1903) に代表される社会進化論の立場である。この思潮において、近代西欧社会の生成は、他の地域に先んじて人類における社会進化の新しい段階を開くものと見なされた。

そして、最後に、以上のような理論上の見解を実証するように現実の世界において進行する、西欧諸国を中心とした国際秩序の組み替え、すなわち、十九世紀中葉にはじまる植民地拡大の動向がある。西欧文明は理念上だけでなく、現実に人類社会の支配者となりつつあった。

日本の知性にとって、十九世紀中葉における西欧文明との出会いは、同時に、以上のような背景をもって、いよいよ確固としたものとなりつつあった西欧中心の文明論との出会いでもあった。そこに描かれた文明論の諸図式をどのように理解するか。また、それを受け入れるのか、それとも拒否するのか。さらには、それを受け入れたとして、その中で、過去から将来にわたる日本あるいは日本文化をどのように位置付けるのか。これらの問いは、近代の日本の知全体を貫く基本的な主題であるが、とりわけ、明治期日本の知識人にとって切迫した課題であった、と言わねばならない。

福澤諭吉 (一八三四—一九〇一) の『文明論之概略』(明治八年、一八

七五) は、この課題に対して正面から解答を与えることを目指した最初の全体的な試みである。しかし、福澤だけが、この課題に取り組んだのではなかった。福澤の場合ほど明示的ではないにせよ、西周など「明六社」に参集した人々をはじめとして、同時代の人々のほとんどが知識人において、それは、基底的な主題として共有されていたと言えるだろう。例えば、加藤弘之 (一八三六—一九一六) における、『人權新説』(一八八二) 以後の、民権論から国権論への「転向」と言われるようなことも、よく指摘される西欧の社会進化論の個別的な理論的影響という枠を越えて、広く西欧中心の文明論的枠組みの受容の仕方という主題の中で考察されるべき問題のように思える。

そのような見直しの作業は、おそらく、明治期の思想史のあらゆる局面において可能だろう。そして、そうした作業を積み重ねることによって、日本近代の知のあり方とその生成について、従来見えていなかった点が明らかになる可能性がある。

しかし、ここで直ちにこうした試みを通史的に枚挙して追うことは、この小論の意図ではない。この小論が目指すことは、そのような全体的な見直しの作業に向けて、視点をより明確にすることであり、とりわけ、それら明治の文明論的思考が、自らの置かれた歴史的な時間の流れと切り結ぶ点の所在を浮き彫りにすることである。

この課題を考えるに当たって特に注目したい側面がある。それは、こ

こで述べた西欧近代の文明論的思惟に共通する特有な時間意識の存在である。コンドルセをはじめとして、それらはいずれも、文明を一方向に進化するものとしてとらえる。文明の歴史的発展にはいくつもの段階が設定されるが、それらは時間軸上に一直線に並べられる。文明には、本質的な多様性は存在せず、ただ発達段階の相違だけがある。このような直線的な歴史的時間のとらえ方は、明治以前の日本には、ほとんど見られなかったものだ。上記の課題を考えるにあたって、私は、西欧近代の文明論に特有なこの時間意識を、明治期の日本の知性がどうとらえたかという点に、特に注目したいと思う。

こうした観点から、本稿では、明治中期に公刊された一編の著作を特に範例として取り上げて、以上に述べてきたような視点から考察を加えたいと思う。それは、徳富蘇峰（一八六三―一九五七）の『将来之日本』（明治十九年、一八八六）である。

私がこの著作を取り上げるのは、それが、西洋文明論に対して正面から取り組んで、その中に日本の社会のあり方を位置付けることを目指している点において、福澤の『文明論之概略』に比肩しうる、同時代ではほとんど唯一の著作であるのみならず、そこに、上記の西欧近代の文明論に特有な時間意識が、さらにより強調された形で見出だされるからである。それは、意識して、それら西欧近代の思惟と歴史的時間を共有しようとした試みである、とさえ見える。蘇峰のそのような努力のうちに

は、日本の近代を開いていった明治という時代にあっても、殊に蘇峰の生きた時期の文明論的な時間軸における八時Vの様相が強く反映しているだろう。

この小論の意図は、このような特徴をもった蘇峰の『将来之日本』の文明論としてのあり方を検証することによって、明治期の日本の文明論的意識のありようを、西洋における文明論的思惟の推移のうちに位置付けることである。

## 二、『将来之日本』の意図と批判

徳富蘇峰は、民友社を設立して雑誌『国民の友』などを刊行した、明治中期以降の代表的なジャーナリストとして、また、戦後まで生きて『近世日本国民史』百巻を著した在野の史家として知られている。この他、多様な著作を通じて、日本の政治、文化について発言し続けたその活動は、彼の生きた時代の思潮に大きな影響を与えたにもかかわらず、今日、その評価は必ずしも高いものではない。

このことは、はじめ民権論の立場に立つ平民主義の唱導者として出発しながら、明治二十七年の著書である『大日本膨脹論』以降、むしろ国家主義を代表するイデオログとなっていったという、彼の政治的立場の変遷についての評価によるところが大きいように思われる。

しかし、そのような政治的立場の評価を離れて、それらの著作を、近

代日本の生成期を生きた一つの意識の表現として見る時、そこには多くの注目すべき論点が見出される。そして、『将来之日本』は、そのような蘇峰の思惟の軌跡の始動点という位置をもつ。この著作は、明治一九年に刊行されて、徳富蘇峰の名を一躍、世に知らしめ、彼のその後の多彩な活動の出発点となった。

蘇峰は、この著作において、開国以後、日本がその中に組みこまれていった、西洋を中心とする近代世界の、過去から一九世紀の現時点にいたる運動と変化の方向を、文明論的な広い視野から把握し、その枠組みの中で、日本の過去と現在の状況を位置づけ、将来において、日本の社会が目指すべき方向と理念とを提示しようとしている。

この著作は、二つの点で注目に値する。

第一に、それが、福澤諭吉の『文明論之概略』と較べうる広い視野において、西洋近代文明の全体像を全的に把握し、また提示しようとしていること。第二に、そこに示された日本の将来についての展望が、およそ百年を経た今日の日本の社会のあり方を大筋において言いあてていると見られることである。

第一の点についてさらに言えば、福澤の『文明論之概略』が日本近代化の出発点における西洋文明理解の基本的な枠組みを示すものと評価されうるのに対して、蘇峰の『将来之日本』は、開化期の急速な西洋文明の摂取の時期を経て、いよいよこれから本格的な近代化へ向かって自ら

の歩みを踏み出そうとする時点で、今や日本をその内に含んでしまった西洋近代文明をとらえなおし対象化しようとする試み、と位置づけることができよう。

第二の点は、歴史の結果からの評価である。蘇峰はこの著作で、日本が将来において目指すべき社会のあり方を、自由貿易体制の国際社会に基礎を置く、平和主義・平民主義の産業社会として描き出した。以後、百年の歴史は、途中、大きな曲折をもったにもかかわらず、結果として現在ある今日の日本の社会は基本的にそのようなあり方に近づいている。この一致は、それ自体、考察に値いしよう。

蘇峰は、このような日本の未来像を、単なる願望やイメージとして描きだしたのではなかった。彼は、それを、国際社会が現に向かいつつある変化の方向の中で、日本の社会が否応なく向かわざるをえない歴史的必然性として提示している。

そのような考察の理論的基礎として、蘇峰が採用した理論の枠組みは、『表2』に示す『将来之日本』の構成目次に、はっきりと見ることができよう。

構成の全体は大きく二つの部分に分れる。全十六回のうち、第十回までは、過去から現在にいたる国際社会のあり方の分析であり、そこから、近い将来において、それがおのずから向かおうとしている発展の方向を取り出し、確定する作業に当てられている。

〔表2〕

『将来之日本』 目次

第一回	洪水ノ後ニハ洪水アリ	(緒論)
第二回	一国ノ生活	(総論)
第三回	腕力世界 一	(第一外部社会四囲ノ境遇。表面ヨリ論ズ)
第四回	腕力世界 二	(同上)
第五回	平和世界 一	(第一外部世界四囲ノ境遇。裏面ヨリ論ズ)
第六回	平和世界 二	(同上)
第七回	平和世界 三	(同上)
第八回	平民主義ノ運動 一	(第二社会自然ノ大勢ヨリ論ズ)
第九回	平民主義ノ運動 二	(同上)
第十回	平民主義ノ運動 三	(同上)
第十一回	天然ノ商業国	(第三我邦特別ノ境遇ヨリ論ズ)
第十二回	過去ノ日本 一	(第四我邦現今ノ形勢ヨリ論ズ)
第十三回	過去ノ日本 二	(同上)
第十四回	現今ノ日本 一	(同上)
第十五回	現今ノ日本 二	(同上)
第十六回	将来ノ日本	(結論)

そして、第十一回以後で、そのようにして取り出された国際社会の変化の方向を分析軸として、過去の日本、すなわち、明治以前の日本社会から明治の日本への変化の、文明論的意味を確認し、日本と世界の、以上のような変化の方向がもたらす必然的帰結として、第十六回「将来ノ日本」で、先に述べたようなビジョンを描き出している。

前半の国際社会の動向の分析は、三つの部分に分かれる。

まずはじめに蘇峰は、「外部社会四囲ノ境遇、表面ヨリ論ズ」として、「腕力世界」、すなわち、軍事力による対決の場として、当時に行たる国際社会のあり様を提示する。彼は、具体的に年表によって、十九世紀に起きた戦争を列举し、欧米列強の軍事力の増強を数字で示して、十九世紀の世界が、これら列強の力と力の対決の場であることを示す。

そしてさらに、ローマ帝国滅亡以後のヨーロッパの歴史が、民族どうしの戦いの歴史であり、その結果としての征服と支配の歴史であること、そして近代にあつては、この力の運動は西から東に向かい、欧米列強によるアジアの植民地化をもたらししていることを述べている。

しかし、次に蘇峰は、「外部世界四囲ノ境遇、裏面ヨリ論ズ」として、同じ当時の国際社会を「平和世界」として提示する。

ここで言われているのは、国際分業体制をもつ産業社会としての近代社会のあり方である。蘇峰は、近代の産業社会において、生産と富との飛躍的な増大をもたらししたのは、貿易による国際分業体制であるとして、十九世紀における各国間の交通・通信の質・量両面における飛躍の様子を数字で示す。そこから二つの帰結が導かれる。

第一に、このようにそれぞれの産業社会の発展にとって必須の要素となつてしまつた国際経済を破壊する戦争は、どの国にも結局は不利益をもたらしということ。そして、第二に、その国の軍事力を支えるのは、

今やその国の経済力に他ならないから、軍事的に強大となるためには、産業を発展させねばならず、そのためには、貿易の持続を保障する平和を保たねばならない、ということだ。

すなわち、「平和世界」という用語で蘇峰が意味しているのは、近代の産業社会にあつては、国どうしの競争は、軍事力の追求から経済力の競争に移行せざるをえないことである。

以上の点を前提として、蘇峰は、このような移行が必然的にもたらす社会の発展の方向として、「平民主義ノ運動」を「社会自然ノ大勢ヨリ論ズ」として提示する。

すなわち、軍事力を主とする社会においては、権力が社会の一部分に集中した体制の方が機能的に優れているために、それに適した価値観として貴族主義が優越する。これに対して、近代の産業社会にあつては、その中心は、生産・流通の経済組織であつて、その担い手は平民である。そして、彼らにできるだけ自由に経済活動を営ませることが、社会の経済発展の条件である。そこから、近代の政治において、「平民主義」こそが主流とならざるをえないし、現に世界の大勢は、その方向に向かっている、と蘇峰は結論づける。

以上が、蘇峰の提示した近代の国際社会の動向の枠組みである。この枠組みの中で、蘇峰は、過去の日本、すなわち明治以前の日本の社会を、軍事優先の貴族主義的社会と位置づけ、明治以後の日本社会の目指

すべき方向を、このような歴史的必然に沿って、政治において平民主義、外交では平和主義をとる、貿易を基礎とする産業社会として提示するのである。

もちろん、以上のような理論的枠組みが、すべて蘇峰の独創によるものであるわけではない。蘇峰自身、『将来之日本』の中で、多くの西洋の文献に言及し、また引用して、自らの所説の論拠としている。

それらの引用文献が蘇峰とこの著作に対して与えた影響については、先行する研究においても多くの指摘がすでになされている。<sup>(1)</sup> それらの中で、蘇峰の理論的枠組みを支える基礎理論を与えたと指摘されている思想は二つある。第一には、コブデン (Richard Cobden, 1804—1865) とブライト (John Bright, 1811—1889) に代表されるマンチェスター学派の自由貿易理論である。個々の経済主体が自己の利益を最大にするために貿易による国際分業が不可欠であつて、そのためには平和を維持せざるをえないというその理論が、蘇峰の言う「平和世界」論の最大の支柱であることは、隅谷三喜男氏はじめ、<sup>(2)</sup> 一致して指摘されている。

第二に、それと並んで言われるのが、ハーバート・スペンサー (Herbert Spencer, 1820—1903) の理論的影響である。この点については、山下重一氏の詳しい研究がある。<sup>(3)</sup> 指摘されるのは、次の点だ。

すなわち、先に述べた蘇峰の理論は、一つの社会を支える機能とし

て、「武備」と「生産」という二つの要素を考え、それらを受けもつ「武備機関」と「生産機関」のあいだの対立関係を理論の軸として展開しているが、それらの用語はスペンサーの『社会学原理』(*Principles of Sociology*, 1876—1896)に述べられた社会理論から採られている、<sup>(5)</sup>ということである。

この中で、スペンサーは、社会の類型として、「武備」の機能を中心とした「軍事型社会」(*the militant type of society*)と、「生産」の機能を中心とした「産業型社会」(*the industrial type of society*)とを指定し、その上で、社会の進化にともなって、「軍事型社会」から「産業型社会」へと変様(*metamorphose*)することが、歴史的必然の方向であることを提示している。<sup>(4)</sup>

これらの点において、蘇峰は、全くスペンサーの理論に依拠して、自らの論述を進めているとされる。

すなわち、蘇峰は、十九世紀の世界の状況に、スペンサーの社会理論をあてはめて、その枠組みの中で、ビスマルクのドイツに代表されるような「軍事型社会」から、ホイッグ党主導のイギリスのような「産業型社会」への漸進的な変化を、時代の大勢と見なしているということだ。そして、蘇峰の言う、武力主義から平和主義への移行とは、そのまま、スペンサーが記した、これら二つの型の社会の特性の部分の記述に拠っている<sup>(5)</sup>ということである。

そして、さらに蘇峰は、その移行の図式を日本にも適用して、徳川時代の幕藩体制を、典型的な「軍事型社会」と見なし、明治維新を、そこから「産業型社会」への転換の出発点として位置づけようとしている、ということになる。

このように見てくると、『将来之日本』における蘇峰の理論的枠組みは、全面的にスペンサーの社会理論のアダプテーションに他ならないことになる。その視点から、この著作に対して批判がなされる。

すなわち、蘇峰は、きわめて長い視野のもとに書かれた一般理論であるスペンサーの社会理論を、強引な仕方ですなわち十九世紀の実際の社会に適用することにより、現実から離れた樂觀論に陥っている、という批判だ。

例えば、山下重一氏は次のように言う。蘇峰は、「軍事型社会」から「産業型社会」への移行を「宇内ノ大勢」つまり世界が向かいつつある大きな変化の方向と見て、それに寄りかかっているが、十九世紀の当時における世界の趨勢は帝国主義に向かう動きであり、むしろ軍事力の増強へと向かっていた。コブデンやブライトの立論は、このような傾向への警告として書かれており、スペンサーにおいても、『社会学原理』の第二部「社会変様」の章で、「産業型社会」から「軍事型社会」へ逆行する場合のことが言及されている。蘇峰は、これらの点を見ず、非主体的に「宇内ノ大勢」に寄りかかったことが、後に、国際環境が帝国主義の様相を激化する中で、むしろ戦闘的な国家主義者へと彼が変質し



ていった要因だ、と山下氏は批判するのである。<sup>(6)</sup>

この批判は、山下氏の著書の主題である、スペンサーの理論の受容と  
いうことに限って言えば、妥当な批判かもしれない。しかし、もしこの  
批判が、蘇峰が単に当時の国際情勢を見誤り、自らの作り上げた楽観的  
な世界像の上に空論を展開している、というように受け取られるなら、  
それは、蘇峰のこの著作のもつ独自の意味を理解しないことになると考  
える。

その点を見るためには、この批判の中で言われている「宇内ノ大勢」  
ということが、蘇峰のテキストにおいて、特有な時間意識と結びついて  
いることを見る必要がある。このことを次説で検討しよう。

### 三、『将来之日本』の時間意識

「宇内ノ大勢」という話は、この著書の終わり近く、維新前後の歴史  
を述べた箇所、日本の開化の勢いがとどめ難いものであったことを言  
う表現として使われている。

ソレ天下ノ大勢ハ幕府ノ未ダ倒レザル。封建社会ノ其勢力ヲ維持シ  
タル。即チ日本鎖国ノ堤防尚存在シタルノ時ニ於テスラ。或ハ知ルニ  
及バザルモノアリ。或ハ知テ制スル能ハザルモノアリ。然ルニ今ヤ天  
破レ。地驚キ。滔々タル洪水ハ天ニ漲リ。山トナク。川トナク。城ト

明治期文明論の時間意識

ナク。市トナク。水天茫々。唯ダ瀾飛ビ。濤舞フノ今日ニ於テ宇内ノ  
大勢ニ抗セントスルソレ難カラズヤ。<sup>(7)</sup>

この文にすぐ続けて、蘇峰は次のように言う。

ソレ世界ノ氣運ハ奔リテ止マザルモノナリ。天下ノ大勢ハ光陰ノ潮  
流ト共ニ動テ止マザルモノナリ。<sup>(8)</sup>

全体は東洋の「氣」の哲学を思わせる文体で書かれているが、ここで  
の「光陰ノ潮流」という表現が、時間の流れそのものについて言ってい  
ることに注目したいと思う。

そのような視点から、この著作を読みなおしてみると、時間あるいは  
「時」の流れに直接、言及している箇所が、非常に多いことが目につ  
く。そして、さらに、それらの言及を貫いて、ひとつの共通な時間意識  
の存在を感じ取ることができる。

『将来之日本』に見られる蘇峰の時間意識の特徴の第一は、「時」の  
流れの方向性、その不可逆性の意識である。

次に挙げる例は、近代における「平民主義」の動向について述べた箇  
所である。

雖然過去ハ既ニ過去ナリ。豈ニ久敷ヲ保タン乎。今日ニ於テ武備ノ機関ト貴族的ノ現象トハ既ニ其宇宙ニ生出シタル所以ノ目的ヲバ達シタリ。渠輩ノ事業ハ既ニ成就セリ。渠輩ノ功蹟ハ我が社会ト人民トヲ此ノ位置ト此ノ時節トニ伴ヒ来レリ。最早渠輩ハ此ノ世ニ要ナキナリ。<sup>(9)</sup>

ここでは、「雖然過去ハ既ニ過去ナリ」に続いて、「既ニ」という語を含む文が三回、繰返され、さらに「最早」という表現が加えられている。そして、この段落の末尾では、次のように言われる。

吾人ハ之ヲ信ズ。第十九世紀社会ノ大烈風ハ既ニ彼ノ上古ニ於テ垂天ノ雲ノ如キ鬱々葱々タル貴族的ノ大木ヲ抜き去レリ。既ニ抜きサレリ。<sup>(10)</sup>

蘇峰は、ここで、「既ニ抜き去レリ」という文を二度にわたって繰返すことにより、貴族主義から平民主義に向かう変化が、もはや後戻りすることのない一方向の運動であることを強調している。同様な表現は、この著作のいたるところに満ちている。

「時」の流れについての蘇峰の表現は、決して新しいものではない。例えば、次の引用のはじめの部分、「天地ハ万物ノ逆旅ニシテ光陰ハ百

代ノ過客ナリ」は、芭蕉の『奥の細道』を想起させる表現であるが、そこで言われている内容は同じではない。

天地ハ万物ノ逆旅ニシテ光陰ハ百代ノ過客ナリ。而シテ此光陰ノ大潮流ト共ニ世界ノ表面ニ発出スル人事ノ現象ハ自カラ運転變動セザル可ラザル者アリ。而シテ其變動ナル者ハ自カラ社会自然ノ大勢ノ為メニ支配セラル者アルヲ見ル也。<sup>(11)</sup>

すなわち、この表現によって表わされる日本の伝統的な「時」の意識が、人間のどのような営みにも永続する痕跡を残すことを許さない八時の過ぎ行きVを思うのに対して、蘇峰において、時は「光陰ノ大潮流」という一つの大きなまとまりとしてとらえられ、その中での変化は予測しえないものではなくて、「社会自然ノ大勢ノ為メニ支配」されているという、具体的な内容と方向とをもつ。

蘇峰が、この「時」の潮流の具体的な内容としてとらえていたもの、それは、西欧近代文明の生成・発展・全世界への拡大という、彼の視野を捕えて離さない、歴史の大運動に他ならない。

蘇峰は、近代の産業社会をもたらした二大要因として、アダム・スミスに代表される経済思想の革新とワットの蒸気機関の発明を挙げ、次のように言う。

自由貿易主義ト蒸氣機關ノ發明トハ雲龍相逐フノ勢ヲナシ。一ノ必要ハ一ノ發明ヲ生ジ。一ノ發明ハ更ニ一ノ必要ヲ生ジ。進歩ヨリ進歩ニ進ミ。發明ヨリ發明ニ移リ。僅々タル五十年。此等ノ大作用ハ実ニ突兀トシテ一ノ新世界ヲ宇宙ニ湧出シタリ。新世界トハ何ゾヤ。第十九世紀ノ世界是也。<sup>(12)</sup>

しかし、こうした変化も、単にそのような短い時間内の出来事ではない。蘇峰においては、それも、長い時の流れの中で定められていた命運としてとらえられている。別の箇所でも次のように言う。

地球ガ地軸ヲ転ジ。其軌道ヲ奔ルヤ端ナク此ノ時節ニ来ラザル可ラサルガ如ク。我ガ世界ノ歴史モ。日月ノ潮流ト共ニ終ニ此ノ意外ナル境遇ニ来ラザル可ラザルノ命運トナレリ。<sup>(13)</sup>

その結果として、当時の世界に進行している事態が、西洋が西洋以外の地域を力によって巻き込み、全世界を一つの文明圏に統合しつつあるという運動なのだ、と蘇峰はとらえる。蘇峰の言う「腕力世界」論のはじめの部分には、「今日ノ世界ハ開化人が暴虐ヲ以テ野蛮人ヲ吞滅スルノ世界ナリ」<sup>(14)</sup>と述べられている。

すなわち、蘇峰が、抗し難い実在として、いつも意識しているのは、

この前進しつつある西欧近代文明に固有の時間の流れだと言ってよいだろう。そして、それは実際、独自の「時」のあり方をもっている。

蘇峰は、「平民主義」について論じた箇所でも、「文明ノ世界ハ、多忙ノ世界ナリ」<sup>(15)</sup>と述べている。西欧文明の時間は、不可逆の方向性をもつだけではない。それは、進行とともにその中での変化の速度をますます増大させる、加速される時間、すべてを加速する時間の流れでもある。

このことは、この時間の流れに西欧諸国に遅れて参加した日本にとって、より切実な事態である。なぜなら、日本が西欧諸国に追い付くためには、それらに倍する速さで自らを変えて行かなければならないが、西欧文明の進行そのものが、ここで述べた時間の特性によって、さらに刻々と加速を加えつつあるからだ。蘇峰は、『将来之日本』に先立って書かれた自著『新日本之青年』（明治十八年、一八八五）から引用して、そのことを指摘している。

試ニ泰西ノ開化史ヲ一瞥セヨ。彼ノ北狄蠻人が鉄劍快馬。羅馬帝国ヲ蹂躪シ遂ニ封建割拠ノ勢ヲ馴致シ。君主。臣僕ノ制度ヲシテ。欧州全土ニ波及セシメシヨリ已来。第十九世紀ノ今日ニ到ル迄。大凡ソ四五百年ノ星霜ヲ経歴シ歩々一步ヲ転ジ。層々一層ヲ上リ。知ラズ識ラズ。今日ニ到レリ。此ノ正經着実ナル進歩ニ反シテ我邦ニ於テハ此ノ數百年ノ長程ヲ一瞬ノ中ニ奔馳シ遂ニ之ガ為メニ數百年前封建ノ残余

ト数百年後文明ノ分子ト同一ノ時代ニ於テ。同一ノ社会ニ於テ。肩ヲ摩シ袂ヲ連ネテ。生活セザル可ラザル奇異ノ現象ヲ霎時ニ幻出スルニ到ラシメタリ。<sup>(16)</sup>

日本は、数百年の西欧文明の生成の時間を「一瞬ノ中ニ奔馳」しようとした。このようにとらえる蘇峰にとって、西欧文明のもつ「時」のあり方は、そのまま日本の文明論的課題に密接に結びついている。

さて、以上の点を整理して言えば、『将来之日本』に見られる蘇峰の時間意識は、不可逆な方向をもち、加速をともしない抗いがたい時間の流れに向けられており、それはそのまま、西欧近代文明の拡大運動に固有な「時」のあり方としてとらえられている、と言ってよいだろう。そしてそれが、蘇峰の言う「宇内ノ大勢」という語の表わすものに他ならない。

#### 四、文明論と時間意識

『将来之日本』における、時間意識と文明論とのこのような結合は、明治期の日本にあっても独自のものである。福澤諭吉の『文明論之概略』は、その文明論的展望の拡がりにおいて、蘇峰のそれを凌駕する側面をもつ。しかし、福澤の場合、西洋文明の優位についての客観的分析はあ

っても、それが時間の流れの必然として日本を押し流すという意識はない。

それでは、この文明論的な時間意識は、蘇峰の社会理論の源泉であるスペンサーから得たものだろうか。

明らかに、そうではない。スペンサーの進化理論とは、単一の原理から発した事象が、いかに分化して多様な万象を現出するかを説明するものであり、それらを一つの方向へと向けて動かすような「時」のあり方など、考えてはいない。先に山下氏の批判の中で触れたように、スペンサーは、個々の特殊な事例においては、進化段階の逆行 (a reversion towards the old type)<sup>(17)</sup> の可能性さえ指摘する。

蘇峰の文明論的な時間意識は、その一方向の直線的なあり方において、むしろ、十九世紀の西欧文明論の原型となった、コンドルセにおける人間精神の段階的発展論に近い。コンドルセは、『人間精神進歩史の概略』第一巻の終章、第十期「人間精神の未来の進歩」の中で、西洋において完成の段階に達した文明が、西洋以外の地域に拡大して行くだろう様子を記述して、次のように述べている。

これらの民族の歩みは、われわれの歩みよりは迅速であり、確実である。何となれば、これらの民族はわれわれが発見しなければならなかったものをただ受け容れればよいであろうからであり、またわれわ

れが長い間誤謬を犯したのちに始めて到達したような純粹な真理や正確な方法を認識するためには、われわれの講義や書物のうちに叙述せられ、証明せられているものを把握することができれば十分であろうからである。<sup>(18)</sup>

ここで言われていることは、内容においても、まさに蘇峰の生きた明治期の日本が遂行しようとしていたことと一致している。十九世紀の歴史は、コンドルセがフランス革命下の牢獄の中で想い描いたとおりの局面を、ヨーロッパからもっとも離れた日本において現出していたのだった。

しかし、記述内容でなく、歴史的時間の進行に対する切迫した意識という意味での時間意識において較べるなら、むしろ、コンドルセのさらに先蹤、西欧近代文明論の祖であるジャン＝ジャック・ルソー (Jean-Jacques Rousseau, 1712—1778) の『人間不平等起源論』 (*Discours sur les origines et les fondements de l'inégalité parmi les hommes*, 1754) の末尾の部分で、社会状態がすでに成立し、暗黒の自然状態に向かつて底なしに下降して行く文明状態について述べている箇所の、切迫した記述に表わされたそれが、もっとも蘇峰の場合に近いように思われる。その一部を引用しよう。

この無秩序とこれらの変革の中から、専制主義がその醜惡な頭を徐々にもたげ、国家のあらゆる部分に良いものや健全なものを認めると、それをすべてむさぼり食い、ついには法も人民もその足下に踏みじり共和国の廢墟の上に自己を確立するにいたるであろう。この最後の変化が起こるまえの時代は、混乱と災害の時代であろう。しかし結局はなにかも怪物に呑みこまれてしまい、人民はもはや首長も法律ももたず単に専制君主だけしかもたなくなるだろう。<sup>(19)</sup>

ルソーやコンドルセと蘇峰との以上のような類似は、テキスト上の影響関係ではありえない。『将来之日本』の中で、蘇峰がルソーについて言及しているのは、ただ一度、『社会契約論』について、それも全く否定的に触れているだけであり、『人間不平等起源論』や、ましてコンドルセの著作などを読んだ形跡はない。したがって、これらのテキストとの類似は、むしろ、蘇峰の意識が位置する文明論的なコンテキストの中に求めるべきだろう。

蘇峰の文明論的な位置をとらえる文脈は二つある。

第一には、西洋における文明論の展開の中での位置である。第一節で述べたように、ルソーに発した批判的な文明論的思惟は、コンドルセによって自己肯定に価値づけが逆転され、十九世紀に受け継がれて、コントラによってさらに展開され、また人類学や生物学の成果を合せて、十

九世紀西欧社会を人類史の頂点の位置へと押し上げる大体系を構築していた。その文明様式の移入国であった日本にとっては、こうした十九世紀西欧の文明論的意識それ自体が、一つの事実としてそのまま受容すべきものであったということである。

第二には、明治日本における、西洋文明受容の進行の中での位置の問題がある。先に福澤について、蘇峰のような切迫した意識が見られないと述べた。それはおそらく、福澤の時代において、日本はまだ完全な形では西洋の文明の自己運動の渦中に巻き込まれていないということを示している。福澤にとって、西洋文明はまだ、その摂取の可非を客観的に論ずべき可能性にとどまっていた。

それに対して、蘇峰の『将来之日本』は、それが書かれた時点において、日本の先端的な知性が、西欧近代という事象を、その現在においてだけでなく文明論的な流れとしてとらえるようになったことを示すとともに、また、すでに日本が、西洋文明のそうした渦の中に、その時点では完全に取り込まれていたことを示しているだろう。

蘇峰とルソーの類似について言えば、二人の間の基本的な一致点は、文明を自己運動する怪物と見て、それに受動的に對していることだ。ルソーは、そのように見ることによって、生成しつつあった西欧近代文明を総体として最初に認識した先駆となった。そして、蘇峰の基本的認識は、日本の近代化を受動的の相においてとらえ続けることであった。この

ことは、およそ十年後、蘇峰がそれ以後国家主義者に転向したと批判されるきっかけとなった著作、『大日本膨脹論』においてもまったく変わらない。そこでは、さらに強い表現で、日本の近代化の受動的な性格を述べている。

孰れにしても、我が開国の事業は、随意にあらずして、強迫により。合意によらずして、恫喝により。開国が天地の公道にして国家の福利、民生の厚益たるを自覚したるよりも、寧ろ外人を畏懼したるより来りしことは、決して争ふ可らざる事実にあらずや。維新の革命は、即ち此の事実に反動して、出て来りたる、歴史的噴火也。<sup>(20)</sup>

蘇峰は「宇内ノ大勢」という語によって、このような認識の下で、絶對的事実として認める他はない西欧文明の自己拡大運動のその時点での動向を指していた。しかし、蘇峰において、この語が、ルソーのそれに近い文明論的時間の性格をもっていたことの意味は小さくない。

なぜなら、ルソーが見出したのは、文明がそれ自体の構造の中に、自らを一つの方向に向かって進行させる内在的なメカニズムをもつことであつた。<sup>(21)</sup> 蘇峰が『将来之日本』に図示したのも、蘇峰のとらえた西欧文明のそうしたメカニズムであつた。それは、客観的な法則に従う構造体であつて、西洋諸国を含めて誰も恣意によって変更することができな

い。その法則自体に対しては、西洋諸国も日本と同様に受動的に受け入れる他はないことになる。蘇峰は、こうして、「宇内ノ大勢」を文明の法則と見なすことにより、日本を一方的な受動の立場から、世界大の文明の運動の担い手として、西欧と対等な立場に、逆説的に引き上げるとに成功する。

それゆえ、「宇内ノ大勢」を設定することは、蘇峰において、いささかも主体性を放棄することを意味しなかった。むしろそれは、のぞましい開国によって受動的立場に置かれた日本が主体性を回復するための、戦略的思惟の不可欠の前提として要請されていた。

『大日本膨脹論』以降も、このような思惟の形式は変わっていない。変わるの、設定される西欧文明の運動法則の内容である。そして、その変更に理論的根拠はない。そこでは、もはや蘇峰は長期的な文明論的展望を失って、目の前の国際情勢の変化を、文明論的なトレンドと取り違えている。『大日本膨脹論』以降の蘇峰が真に批判されるべき点は、この点であるように、私には思われる。

西欧近代の文明論の原点であるルソーは、文明の進行の行くえについて、徹底したペシミストであった。『将来之日本』の外見的には樂觀的な結論にもかかわらず、蘇峰の文明論の時間意識が示す基調は、むしろルソーに共通するペシミズムである。それは、日本の近代化の基底的な受動性の認識に基づいている。

同時代の西洋の文明論の中にあっても、蘇峰の文明論の時間意識は独自なものである。はじめに述べたように、この時代、西洋の文明論は自己肯定の頂点に昇りつめようとしていた。コンドルセがすでに指摘しているように、西欧文明の他の地域への拡大ということが、文明の必然の展開であるならば、そうした運動にともなう新たな接触によって、新たな文明論的意識が生れて来よう。そうした意識が、いずれ西欧文明そのものの運命に係わってくる。蘇峰の文明論は、その意味で、西欧近代の文明論の歴史にとって、新しい段階が始まったことを告げるものである。

やがて時が移り、二十世紀を迎えると間もなく、西洋文明論の新しい展開として、シュペングラー(Oswald Spengler, 1880—1936)の『西洋の没落』(*Der Untergang der Abendlandes*, 1918—1922)が現れ、トインビー(Arnold Toynbee, 1889—1975)の『歴史の研究』(*A Study of History*, 1934—1961)に受け継がれて、二十世紀における支配的な文明論を形成する。

それらに共通することは、西欧文明を普遍的な唯一の文明のあり方としてでなく、かつて存在した複数の文明の一つとしてとらえて、その生成・推移のありさまを客観的に見る立場であり、また、他の文明との接触について多様な側面を見ようとすることである。

蘇峰の文明論は、西欧文明という一つの文明だけについて言えば、こ

これらの視点を先取りしている。そのことをもたらしたのは、西欧近代文明の拡大運動の最先端に位置した、明治期の日本のもつ文明論的な位置であったと言つてよい。

徳富蘇峰の『将来之日本』は、このような視点をも含めて、明治期の日本を代表する文明論の一つの極として、さらに多くの面から評価しなおされる必要があると考える。

注

- (1) 蘇峰における西洋思想の影響について、この小論で参照して、大きな示唆を受けた先行する研究のうち、主なものとしては、後述する隅谷三喜男氏および山下重一氏の研究の他に、今井宏氏の『明治日本とイギリス革命』がある。今井宏『明治日本とイギリス革命』、研究社、一九七四年、第三章「田舎紳士」の主張―徳富蘇峰の出発点、九〇―一二七頁。
- (2) 隅谷三喜男「明治ナショナリズムの軌跡」、隅谷三喜男編『日本の名著 40 徳富蘇峰・山路愛山』、中央公論社、一九七一年、所収、二〇―二二頁、参照。
- (3) 山下重一『スペンサーと日本近代』、御茶の水書房、一九八三年、一〇四―一八頁。
- (4) Spencer, H., *Principles of Sociology*, D. Appleton & Co., New York, 1883, vol. II, pt. V, ch. XVII-XIX, pp. 568-667.
- (5) 山下重一「前掲書」一一〇―一二二頁。
- (6) 同書、一一六―一二八頁。
- (7) 徳富蘇峰『将来之日本』、植手通有編『徳富蘇峰集』(明治文学全集34)、筑摩書房、一九七四年、所収、一一〇頁。以下、『将来之日本』からの引用は、すべて基本的に上記のテキストによるが、表記については『福澤論

吉・三宅雪嶺・中江兆民・岡倉天心・徳富蘇峰・内村鑑三集』(現代日本文学体系 2)、筑摩書房、一九七二年、所収のテキストを参考にして、一部分、改めたところがある。

- (8) 同頁。
- (9) 同書、八六頁。
- (10) 同頁。
- (11) 同書、八〇頁。
- (12) 同書、六七頁。
- (13) 同書、八二頁。
- (14) 同書、五七頁。
- (15) 同書、八四頁。
- (16) 同書、一〇六頁。
- (17) Spencer, H., *op. cit.*, vol. I, 1879, p. 608.
- (18) Condorcet, M., *Esquisse d'un tableau des progrès de l'esprit humain*, Paris, 1795, reprint, Georg Olms Verlag, Hildesheim, 1981, p. 319. 訳文は「コンドルセ『人間精神進歩史』、岩波文庫、一九五一年第一部、二五四頁。
- (19) Rousseau, J.-J., *Discours sur les origines et les fondements de l'inégalité parmi les hommes*, in *Oeuvres Complètes*, Bibliothèque de la Pléiade, Paris, 1964, t. III, pp. 190-191.
- (20) 徳富蘇峰『大日本膨脹論』、植手通有編『徳富蘇峰集』(前出)所収、二六一頁。
- (21) ルソーにおける「時」の意識と文明論との関わりについては、下記の拙稿に詳述した。小宮彰「ルソーと不可逆の「時」」、『思想』第四六七号、一九七八、一五一―一六九頁。

〔文理学部専任講師(哲学) 一九八二―八三年度個人研究員〕